



見る  
は  
触  
れ  
る

Seeing  
as though touching

水木 塁 Mizuki Rui  
 澤田 華 Sawada Hana  
 多和田有希 Tawada Yuki  
 永田康祐 Nagata Kosuke  
 岩井 優 Iwai Masaru

東京都写真美術館 3階展示室  
 恵比寿ガーデンプレイス内

開館時間：10:00-18:00（木・金曜日は20:00まで）※入館は閉館の30分前まで

休館日：毎週月曜日（月曜日が祝休日の場合開館し、翌平日休館）

観覧料：一般700円 / 学生560円 / 中学生・65歳以上350円

小学生以下、都内在住・在学の中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者（2名まで）は無料。

本展はオンラインによる日時指定予約を推奨いたします。

事業は諸般の事情により変更することがございます。

最新情報は当館ホームページでご確認ください。

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、東京新聞

助成：芸術文化振興基金  協賛：東京都写真美術館支援会員

2022年9月2日（金）

→ 12月11日（日）

日本の新進作家 vol.19  
 Contemporary  
 Japanese Photography vol.19

## 水木壘

1983年生まれ、京都市立芸術大学美術学部工芸科漆工専攻卒業。京都市立芸術大学美術研究科メディア・アート領域博士号取得。都市文化と美術史上の問題を接続することで、現代都市におけるリアリズムを基にした風景と情景の関係性をテーマに制作を行う。とりわけ近年は「自然」の定義を「人間のアクティビティーの彼岸」として捉え、様々なメディアを用いて作品を展開している。近年の展覧会に、「ON ーものと身体、接点から」(清須市はるひ美術館、2022年)、「constellation #02」(rin art association、2021年)、個展「東下り」(WAITINGROOM、2019年)、個展「鏡と穴-彫刻と写真の界面 vol.3 水木壘」(gallery α M、2017年)など。

## Mizuki Rui



水木壘《雑草のポートレートおよび都市の地質学(dubbed version 3)》2022年

## 澤田華

1990年生まれ、京都精華大学芸術研究科博士前期課程修了。物事を認識する際に生じた些細な引っ掛かりを起点として、図像と想像の相互関係を検証するプロセスを作品化し、写真・映像をはじめとした様々な表現形態を用いて展開する。主な展覧会に、「第3回PATinKyoto京都版画トリエンナーレ2022」(京都市京セラ美術館、2022年)、「あいちトリエンナーレ2019 情の時代」(愛知県美術館ギャラリー、2019年)、個展「夏のオープンラボ: 澤田華360°の迂回」(広島市現代美術館、2020年)など。

## Sawada Hana



澤田華《64のポストビューおよび目のシーン》2021年

## 多和田有希

1978年生まれ、東北大学農学部応用生物化学科生命工学専攻卒業、ロンドン芸術大学キャンパーウェル・カレッジ・オブ・アーツ卒業、東京藝術大学美術研究科先端芸術表現専攻博士後期課程修了。京都芸術大学准教授。写真療法のリサーチをベースに、人間の精神的治癒のシステムをテーマに制作をしている。自らの撮影した写真表面を消す(削る、燃やすなど)という行為を通し、都市や群衆の集合的無意識や個の意識変容をイメージとして湧出させる。主な展覧会に、「第12回恵比寿映像祭 時間を想像する」(東京都写真美術館、2020年)、「写真都市展 ウィリアム・クラインと22世紀を生きる写真家たち」(21\_21 DESIGN SIGHT、2018年)、個展「悪魔祓い、系統樹、神経の森」(G/P gallery、2018年)など。

## Tawada Yuki

表面図版: 多和田有希 (I am in You) 2018年 Courtesy of rin art association

## 永田康祐

1990年生まれ。社会制度やメディア技術、知覚システムといった人間が物事を認識する基礎となっている要素に着目し、あるものを他のものから区別するプロセスに伴う曖昧さについてあつかった作品を制作している。主な展覧会に、個展「約束の凝集 vol.2 永田康祐 | イート」(gallery α M、2020年)、「FALSE SPACES 虚現空間」(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2019年)、「あいちトリエンナーレ2019 情の時代」(愛知県美術館、2019年)、「オープン・スペース2018 イン・トランジション」(NTTコミュニケーション・センター、2018年)、「第10回恵比寿映像祭 インヴィジブル」(東京都写真美術館、2018年)など。

## Nagata Kosuke



永田康祐 (Function Composition) 2019年 [参考図版] Courtesy of ANOMALY

## 岩井優

1975年生まれ、東京藝術大学美術研究科博士後期課程修了。国内外の地域にて参与的な手法で活動に取り組み、クレンジング(洗浄・浄化)を主題に、映像、インスタレーション、パフォーマンスを展開している。主な展覧会に、「ヨコハマトリエンナーレ2020 AFTERGLOW ー光の破片をつかまえる」(横浜美術館、2020年)、「新・今日の作家展2018 定点なき視点」(横浜市民ギャラリー、2018年)、「リボンアート・フェスティバル2017」(宮城県石巻市街地、牡鹿半島、2017年)、個展「公開制作83 岩井優 ハウツー・クリーンアップ・ザ・ミュージアム」(府中市美術館、2021年)、個展「コントロール・ダイアリーズ」(Takuro Someya Contemporary Art、2020年)など。

## Iwai Masaru



岩井優《経験的空模様 #1》(Control diariesより) 2020年 Photo: Shu Yamakawa ©Masaru Iwai, Courtesy of Takuro Someya Contemporary Art

# 見るは触れる

Seeing  
as though touching

## 日本の新進作家 vol.19

### Contemporary Japanese Photography vol.19

東京都写真美術館では、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するため、新しい創造活動の展開の場として「日本の新進作家」展を2002年より開催しています。第19回目となる本展では、写真・映像イメージの持つテクスチュア(手触り)を起点に、写されたイメージのみならず、イメージの支持体となるメディアそれ自体への考察をうながす、5名の新進作家の試みをご紹介します。

写真・映像とは本来、物質性をとめない、見る者の身体と密接な関係の中で存在するメディアと言えます。しかしながら美術館という、作品から一定の距離をとり鑑賞することが求められる場においては、作品に触れ、その肌理や重量を感じることは許されません。にもかかわらず、そうした状況においても、わたしたちは視覚のみから作品のテクスチュアを感じ取る、豊かな想像力を有しています。さらに、コロナ禍において接触が禁止される世界にあっても、視覚や聴覚を最大限働かせることで、アクリル板やモニター越しに相対するモノの手触りを知覚することが可能です。本展でご紹介する5名の作家による写真・映像作品は、視覚を通しその物質としての手触りを想起させます。さらに、わたしたちが今見ているイメージとは、どのような物質から構成されているのか、イメージの生成プロセスのみならず、写真・映像メディアの本質へと目を向けさせます。本展は、5名の作家による探求を通し、多様化し掴みどころのない写真・映像メディアの現在地を捉える機会となるでしょう。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel: 03-3280-0099 www.topmuseum.jp

東京都写真美術館  
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分。当館には駐車場はございません。近隣の有料駐車場をご利用ください。